

「2024年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学教育学部4年 洪 克樹

浙江大学の留学プログラムに関して、語学学習と文化交流の二つの側面から報告する。

まず語学学習について、現地ではレベル別の語学授業、私は HSK 四級レベルのクラスで二週間を過ごした。授業はライティング、リーディング、スピーキングに分かれ、それぞれ異なる中国人の講師によって全て中国語で行われた。範囲としては在校中に教科書の第一課分をちょうど学習したが、京都大学での中国語の授業とやり方自体はさほど変わらなかったと思う。しかし、似た方法、内容であっても、中国語で授業が行われたことで、聞き取れないことや理解できないことに直面する機会が何度もあり、授業でも周りの多国籍な学生の会話レベルの高さに驚かされた。特にヨーロッパや東南アジアの海外の学生はスピーキングが得意な生徒が多く、日本人は英語が話せないとよく指摘されがちだが、中国語教育においてもこの問題が存在しているように感じた。しかし、留学前と比較すれば、教科書で学んだ中国語を授業内外の実際の場面で現地の中国人に対して使うこと、例えば、生活に必要なものを購入したり、道を尋ねたり、様々なアクシデントに対応したりと多様なコンテクストを経験していく中で、より実践的な中国語のコミュニケーション能力が身についたと思う。プログラムを通して、中国語を実際の場面で使うことへのハードルが大きく下がり、今後の学習においても、さらなる文法や表現を積極的に学んでいくことで、中国人とより豊かな関係性が築けるようになりたいと考えるようになった。

次に文化交流に関してだが、杭州市内の観光や、その周辺都市での文化交流を通して、建造物や道路、大学設備のスケールの大きさや、博物館や美術館で展示される歴史の重みに圧倒された。二週間という期間ではあったが、浙江大学のメインキャンパスを訪問して大学設備の大きさや、杭州の様々な歴史や文化、スタートアップやテクノロジーという街が持つ未来都市のような構想を目の当たりにして、変わりゆく中国の動きの流れを体感することができた。また浙江大学の学生と行った共同セミナーでは、事前に幾つかのトピックについてプレゼンテーションを準備し、それについて討論を行うことができたため、学んだ中国語を生かし、実際の同年代の中国人から様々な意見を聞ける機会となった。実際に一对一の話し合いや一人の人間同士で関わる経験をしたことで、日本で報道されているメディアの描写する中国人と実際の人間性には大きく乖離があることを実感した。こうした交流を通して、よりお互いの国について、自分が実際に関わった人間や文化から知っていくことは、よりよい理解と関係性の構築に繋がっていくのだろうと実感した。

今回の留学での学習成果と文化交流を踏まえ、帰国後も HSK の取得を目指して中国語の学習を継続して行っていくことで、中国語の技能の上達や中国人とより円滑により深い話題についても議論できるようになりたいと考えるようになった。短期での留学ではあったが、授業と文化交流がバランスよく散りばめられていたため、杭州や浙江大学の人々と様々な仕方で触れ合うことができたと思う。今後の進路に関してだが、中国人と関わる仕事や、中国と取引のある会社は非常に多いため、社会人になってからも中国語を使用する場面に多く遭遇することが予想される。そのため、そういった機会において、今回の経験を生かせるように、ぜひ今後も言語学習や文化交流に積極的に参加していきたいと考えている。